

くりまっこ

元気いっぱい 笑顔あふれる 栗真の子



地震・津波による「垂直」避難訓練を実施しました！

1月12日（金）に、地震後に「津波警報」が発令されたことを想定した避難訓練を実施しました。前回の10月27日には、津波が津市に到着するまでに時間的余裕がある場合の高台への「水平避難」の訓練を実施しましたが、今回は、津波の到達予測時刻までに高台へ避難する時間的余裕がない場合の避難方法である「垂直避難」の訓練でした。栗真小学校の垂直避難場所は、本校の3階及び屋上となっています。本校の3階及び屋上は、津市が発表している津波の最大値よりも高い位置にあり、安全を確保することができるため、本校周辺地域の避難場所としても指定されています。

今回実施した垂直避難の訓練でも、地震の発生後、揺れが収まったことを受けて、運動場へ避難します。全員が無事に避難できたことを確認すると同時に、地震の震源地の場所や津市の震度とともに、「津波警報」等が発令されていないかなどなどの情報を収集します。「津波警報」が発令された場合には、津市に到達する予測時間や津波の予測される高さなどを確認し、「水平避難」と「垂直避難」のどちらがより安全かを判断します。今回は、津波の到達するまでに時間的余裕がないことを想定し、校舎の倒壊等がないか安全を確認してから、校舎の中へ移動しました。校舎の中に入ってからは、3階に避難し、3つの教室に学年別に分かれて、全員の無事を確認しました。そこで、非常食の入った袋を一人ひとりが受け取ってから、さらに屋上へと避難しました。

【参考】2022年3月に策定された津市における「南海トラフ地震による津波を想定した広域避難計画」では、南海トラフ地震が発生した場合、津市の沿岸部に約67分で津波が到達し、津波の高さは最大7mに達するとなっています。震源地の場所や地震の大きさにより、津波の到達時間や高さにも大きな違いが生じます。10月の「水平避難」の訓練では、高台への避難に、休憩なしで45分かかっています。



「垂直避難」の必要性は、次のような場合にも考えられます。栗真地区内は、津波が伊勢湾に押し寄せた場合であっても、ある程度の津波であれば、海岸の堤防により防ぐことはでき

ますが、その津波が志登茂川を遡上し、横川へと入り込んでくることも予想されます。「水平避難」の場合、その横川の土手が避難経路となっているため、津波が到着するまでの時間に十分な余裕がなければいけません。また、地震の大きさが震度6以上の場合には、建物や地面などが大きな被害を受けている可能性が高いです。古い家屋が倒壊し、避難経路がふさがれていたり、豊野団地へ上る坂道が崩れていたりして、避難場所に到達できない場合も考えておかないといけません。このように、「水平避難」のリスクが高い場合には、今回のような「垂直避難」が必要になってきます。

【参考】今年のお正月、1月1日の午後4時10分頃、石川県能登地方を震源とする地震があり、石川県志賀町で震度7を観測しました。この地震により、北海道から九州にかけ広い範囲で揺れを観測し、津市でも、震度3の揺れを感じました。また、この地震により、気象庁は、能登地方に大津波警報を発表し、輪島港では1.2m以上の津波を観測しました。津波は、震源がたとえ内陸でも、地下の断層が海底にまでつながっていれば起こる可能性があるそうです。その場合、津波は陸地近くで起こるため、すぐに海岸に押し寄せるようで、輪島港では、地震発生のおよそ10分後に1.2m以上の津波を観測したと報道されています。また、最も津波の被害の大きかった珠洲市を含めた地域では、大津波警報が発令されるまでに、津波は既に到達していたとも報道されています。

◇◇◇ 安濃津の港街を壊滅させた明応地震 ◇◇◇

伊勢湾内は、太平洋に面した地域と比べ、海溝型の地震による大津波からは、比較的安全だと思われています。しかし、室町時代後期（戦国時代初期）の1498年に起こった明応地震による津波により、現在の津市の辺りも、甚大な被害を受けました。

現在の津市辺りには、「安濃津」という港があり、日本最古の海洋法規集の文献に、日本の10大港湾都市のうちの1つとして挙げられています。また、中国の明の時代の歴史書には、日本の三大港の1つとして安濃津が記されています。このように、室町時代の頃には既に、安濃津が繁栄した港街都市として、日本だけでなく中国にも知られていたことが分かります。

しかし、明応地震による大津波が安濃津の港街を襲い、これを壊滅させ、街の繁栄が一瞬の間に消滅してしまったと言われています。この明応地震は、東海・東南・南海の3連動地震（推定M8.7）とされ、地震による大津波は、各地で大きな被害を発生させたと言われています。津市を襲った津波の高さは推定6mほどだと言われていますが、静岡県の駿河湾内の沼津市沿岸では36mの高さまで達したと言われています。明応地震から28年後に安濃津を通り過ぎた連歌師の宗長によると、「繁栄していた安濃津の港街は、明応地震の大津波によって壊滅し、10余年を超える年月を経た今も荒野のまま」とであると詠んでいたそうです。